

ラ撮影などの趣味と、重砲兵第三連隊の戦友会の世話をしておられる。関東軍の戦史に詳しい。

(愛媛県 山本 繁夫)

東京ダモイへの道は遠かった

愛媛県 東 兼隆

私達は、昭和二十年十月、牡丹江から貨車でイルクーツク州タイセット地区へ抑留されました。バイカル湖の北側を通るバーム鉄道の建設が私達の主な抑留の目的で、それまではソ連の囚人とドイツ軍の捕虜等でシベリア鉄道本線のタイセット駅から六十八キロまでがどうにか通過できるまでになっていました。

私達日本人の抑留者は、残り約二百三十キロをドイツ軍と交替して建設することになりました。六十八キロからは人跡未踏のタイガ地帯が多く、鉄道建設の土工作业はとても重労働で、寒さとともに食糧不足、量も少なくさらに雑穀の質も悪いので消化不良の原因

となり、栄養失調の患者が続出し、特に兵卒は食糧の分配にしても割の悪い日が続ぎ、年老いた兵卒に犠牲者が多かったように思います。

鉄道の建設が進むに従って奥地へ奥地へと、ブラーツク方面に向けて移動しました。

昭和二十三年雪解けも近い四月頃になったある日、収容所長から東京ダモイの通達が届きました。これまで幾度となく騙されてきたので、またかと、すぐには信じられませんでした。が、しばらくして今度こそ本当らしく、まわりの者はいなくなっていました。私達も早速仕事を片付け、僅かに残っている身の回りの物をまとめて収容所内の広場へ集合しました。これまで何度も仲間達を見送りましたが、今度はいよいよ自分達の番となり帰国できるとなると、何だか夢のような気持ちでいっぱいでした。

ただし収容所では一人だけ残留した者がおりました。彼の前歴の詳しいことは不明ですが、噂によると、ある収容所では偉い身分だったとかで、日頃から特務機関か憲兵か特高警察または官憲か、いずれにせ

よ胡散臭い人物のようでした。いつも若い兵士に近づき何かと話しかけたりしていましたが、別に作業はせず、作業隊の員数外の特別扱いのようでした。

舞鶴へ上陸後、引揚援護局で、当時どこで何をしていたか、また残留者について調査の時、前述の残留した一人の山形鉄郎の名前を申し出ると、調査員は即座に「その人物については調査して判明しているのよ、偽名だ」と言われました。やはり私達の思っていたことは本当だったようです。彼は私共抑留者の先頭に立って民主化運動の一員のようでした。しかしダモイ列車の車中ではまだ彼の前歴など知るはずもありませんでした。

バイカル湖を通過する頃から、私達の貨車の者は民主化運動の心構えが不足しているとか、弁証法的史的唯物論について勉強せよとか色々注文や指摘をされるようになってきてうるさくなかったが、私達は、日本へ帰国するのだ、今さら何事か、帰国したらどうしよう、故郷の親、兄弟はどうなっているだろうか、食糧や衣類は足りているだろうかという思いで、共産主義

とか民主主義の話があっても上の空でした。貨車にはそれぞれ五〇人ずつ乗っており、一列車一、〇〇〇人の大移動となると食糧その他生活必需品の車両も連結しなければならず、警備兵の車両等で二十数両になっていました。

各車両には貨車の長を選任し統制をとっていました。私共の貨車は、長の奈良県の井田正一（旧軍曹）以下若い兵が多く、高知県の山下泉、愛媛県では伊東登、米田茂、そして私以下五〇人で、ナホトカ行きのダモイ列車は抑留のために連行される時と相違し監視兵達は放任状態でしたが、かえって日本人の方が民主グループや「立つ鳥跡を濁さず」とか、何かにつけてかまびすしいくらいでした。

車窓から眺める外の景色は実に広大で、極東シベリアの荒野は何日走行しても白樺やどろ柳などが点在し、入植不能の沼地や不毛の地のような所もあり荒廃したまま放置された原野が続き、人工的に耕作されたと思われる農地はほとんどなく、開拓するにしても、半年は雪におおわれる寒冷地では資本と労働力と人を

いくら投入しても成功しないだろうと思いましたが。長いダモイの旅の途中にはタイガの森林地帯もあり、チタ地区だと教えられました。現在はロシアのミサイル基地になっているとか、最近になって知りました。

五月初旬頃やつと海が見える所に着き、子供達に尋ねると「ナホトカ」と返事したので、小躍りして万歳と叫びながら喜び合いました。ここまで来ればすんなりと日本へ帰国できると信じて疑う者はいませんでした。しかし次第に時間がたつにつれ様子が変わってきました。

ナホトカのアクチーブの者達がやって来て、何号車の者は私達の後について来いと別の場所へ案内され、そこでの話は「お前達はこの偉大なるソ連に来て二年余りにもなっているが、共産主義思想の理論的武装がまだ身についていないとの報告があった。従ってこのまま帰国させることはできない。今日からまた働きながら再教育をすることになった。幸い日本の船は君達を迎えに来ていない。これから一生懸命共産主義を勉強して下さい」とのことでした。

しかし、昭和二十三年五月には、引揚船明優丸他十隻が出航しており、極めて順調に引揚げが行われている記録があります。六月は十三隻、七月は十七隻等となっています。民主グループによって私達若い者を集中のに共産主義教育をしたようです。「この年からソ連引揚者の動向が政治運動や待遇改善要求などで次第に活発になり、後半期には一部業務拒否等も起り、赤い引揚者の異名が生まれた」と舞鶴引揚史年表に掲載されています。私も、共産主義思想に洗脳されて「日本列島へ敵前上陸だ」、当時の「内閣ぶつ倒せ、男ならやってみよ」と替え歌を歌うまでになっていました。そのためか、復員後長期にわたり地方局の上甲某という特高警察に監視されていました。

ダモイ列車の運行中逃亡者が出ないよう、出発する直前に歩行困難な木靴（底が木材で上部は布）が私達全員に支給されました。この木靴を最初に考案したのは、ドイツ兵達の逃亡者が多いので、それを阻止するために履かせたら効果があったためと聞きました。ナホトカで作業用に支給された靴は、ソ連製で馬の真皮

で黒色、爪先は山椒魚の頭部のように丸味を帯びて履き具合の良い、しかも非常に丈夫であったので、物資不足の敗戦国日本へ帰国後も、地下足袋のかわりによく履いたことを忘れません。

今度作業に再出発するために乗車した汽車は客車で、それぞれ各部屋は四人掛けの寝台兼用二段ベッド式で、木製の座席になっていました。一行はウスリースク駅で下車しジープに乗り換え出発。どれだけ走行したか集落のある所で下車。以後徒歩で大草原の真っ只中まで歩き小休止していると、トレーラー車が食糧や資材を満載して横づけになりました。

早速今夜から起居する天幕を張り、その外側に溝を掘って雨水が内側に流入しないようにしたり、また炊事場、簡易浴場（ドラム缶製）も露天に完成しました。

作業隊の我々の一行は二〇〇人で編成され、幕舎は全部で四棟できました。便所も少し離れた所に穴を掘り、二本の厚い板を渡した簡単なものなのです。

次に草刈鎌が支給され、ソ連の国旗と同じ形でし

た。また刃を砥ぐ石も支給され、翌日から早速草刈りが始まりました。私は農家出身ですから早速調子良く竹箒で庭を掃く要領で腰をすえ、上半身を回転させながらシャリンシャリンとなでるようになぎ払うと面白くように刈れました。暫くすると切れ味が悪くなるので砥石で刃を砥ぐとまた切れが良くなり、いつもノルマを達成することができました。ソ連製の鎌は力を入れて振りまわしても上手に刈れません。手や腕は身体の回転に合わせてただ支えているだけで、刈り方にはこつ（要領）があります。最初の間は草も柔らかくて短いから刈り残しも少なく順調に刈り取っていました。草が大きくなるにつれて堅くなるので、ノルマ達成がむずかしくなると虎刈り（縞模様）に刈ってゆく）をして面積をごまかすようになりましたが、現場監督もうるさくダイバイイとは言わず、機械（トラック）に刈払機を取り付けたもの）を導入して人力の何十倍も何百倍も刈り取って行くので、機械力には適わないなあと感じっていると、次には熊手のような道具で「干草を集めよ」と、作業が替わりました。

毎日作業が終わり、帰りには必ず馬鈴薯畑から収穫した後に放置してある薯の茎を各自一抱えずつ持って帰ることにりましたが、何にするのだろうと思っていると、その葉は炊事と浴場の薪の代用として使うのだと教えられました。タイセット地区は針葉樹林地帯なので薪には困りませんでした。大草原地帯では干草や野菜の茎が燃料として利用されていました。所が変われば品変わるの諺どおり、うまく利用されているので感心しました。

また、娯楽といえれば一カ月に一度くらい映画の巡回がありました。露天で暗くなるのを待つて写し始めるのですが、白夜の夏はスクリーンの映りが悪く、私ども日本人には言葉が判らないモノクロ映画よりも、早く帰って寝ることを希望しましたが、地元のソ連の人達は満足していた様子でした。

大草原で、しかも大陸性気候の盛夏の頃になるにつれて、日中はどこにも日陰がなく、風が吹かない時刻には日射病で倒れる者が出始め、安静に寝かして休息させる場所がなく、また医者も薬も早速には間に合わ

ず、応急手当で用の氷もないので、近くの水溜まりを探し、タオルを濡らしては病人の頭や胸等を冷やすのが精いっぱい応急手当でした。

遙か彼方の地平線上には暗雲とともにスコールがこちらに向かってすさまじい勢いで移動しているのが見えます。見上げると自分達の頭上にも厚い雲が日光を遮り始めている、そのためか少し気温が下降し始めた感じになりました。空を見上げながら、「しめた、これで病人も楽になるぞ。スコールよ早く来い」と折る気持ちで待っていると、やがて地上の草いきれも消えた頃ようやく雨粒が落ちてき始めました。またたく間に大粒の雨がたたきつけるような音を立てていましたが、やがて通り過ぎた頃には全身ずぶ濡れになっていました。気分は爽快そのものでした。「ありがとうスコール君、また明日も必ず私達の所へ来てくれ」と願っていましたが、時にはそこまで来て急に横に曲がり去って行ったこともありました。

誰かが近くで虹だと叫びましたので見ると、近くの草むらから斜め上空に向かって昇ったまま大空で消え

て、地上には下降していません。日本の虹のような円形とはスケールも違い実に美しい七色の虹でした。

やがて私達は、スコールで先程溜まった少々濁った水でしたが、腹いっぱい飲むことができました。地熱で生ぬるいけれども甘い感じがしました。また別の大きな深い所の水は冷たくて辛いような気がして、場所と条件により味や感じ方が異なることもわかりました。また飲む前には先ず水中に生き物があるかどうか確かめて、生き物が棲息しておれば腐敗は少なく先ず安心だと思つて飲みましたが、今考えてみますと勝手な推測であり、ほかに検査の方法がないこともその理由の一つでした。浮かんでいる異物やボーフラを飲み込まない方法として、先ずタオルを水面に浮かべタオルに口を付けてろ過して飲むと、喉が乾いているので本当に美味しかったことが忘れられません。当時、病原菌とか衛生上とかを考える余裕は少しもありませんでした。

三年間もシベリアで生活した期間に、私共は野獣に近い身体に変身したのではないかとさえ思うようになります。

つていました。今振り返ると、とんでもないことを平気で実行していたようでした。

ある時は、ノルマをグループに頼みワイヤーロープ（綱線）を拾つてきて釣針を作り、それで沼の淵で魚を釣り食糧の不足を補うことを考え、先ず沼に入り歩いて行くと必ず魚は驚いて別の藻の中へ移動するので、濁りを辿つて釣針を垂らすと魚が面白いように釣れました。その魚の大部分は鮫と鰻でした。

また別の組は、小溝のようになっていて場所へ真つ黒な二枚貝を取りに行き、溝の中には足の踏み場もない程貝がたくさんいて、取つた貝は持ち帰つて食糧を増量したので案外皆元気で夏を過ごすことができました。

日差し強い日中に裸で作業をしていると肌がヒリヒリと痛くなり、そのまま引き続き長時間日光に晒すと皮膚は二、三日でケロイド状になって見るも無惨な形状が痛々しく、このようなケロイド状になったことは見たことも聞いたこともありませんでした。多分赤外線か紫外線が強いため炎症をおこしたのでしょ

う。シベリアでは冬將軍、そして凍傷と恐ろしいことが身のまわりにいっぱい潜んでいました。

私共が元気で帰国できた理由にはいま一つ訳がありました。その理由とは、作業隊員は、シベリア抑留地の中でも一番過酷な所と言われたタイセット地区で生と死の狭間から生き延びた幸運なつわものどもばかりで、比較的若者が多かったからだと思っています。そして昭和二十三年十月十三日、待望の高砂丸で全員無事舞鶴市の平棧橋に上陸、帰国することができました。

不幸にも抑留中過酷な労働と飢餓と寒さや病魔のため犠牲となられ、今もなお凍土に眠る幾多の御霊に対し、「安らかに眠って下さい。二度と過ちを起こしませんから」と堅く誓います。

合掌

【執筆者の紹介】

昭和十八年九月 中野高等無線本科卒業
昭和二十年二月 滿州東安電信第七連隊

四月 〃 第四六連隊

六月 牡丹江へ移駐

八月 横道河子にて終戦

十月 入ソ。タイセット地区

昭和二十三年十月 復員

復員後は、好藤村農協等に勤務。

(愛媛県 山本 繁夫)

抑留生活を振り返って

愛媛県 菅 多喜雄

はじめに

昭和二十三年十一月一日に夢にまで見た祖国への帰還の第一歩をやるしてから既に五十年も経過しているし、三年有余のいまわしい抑留生活を私は人生最大の恥辱とも思っただけで、唯の一度も振り返ったり思い出してみたこともなかったもので、当時の記憶は遠く忘却のかなたに押し流されてしまっただけで、今では定かでない。